

あなたがたを捨てて孤児にはしない

ヨハネ福音書14:18-21

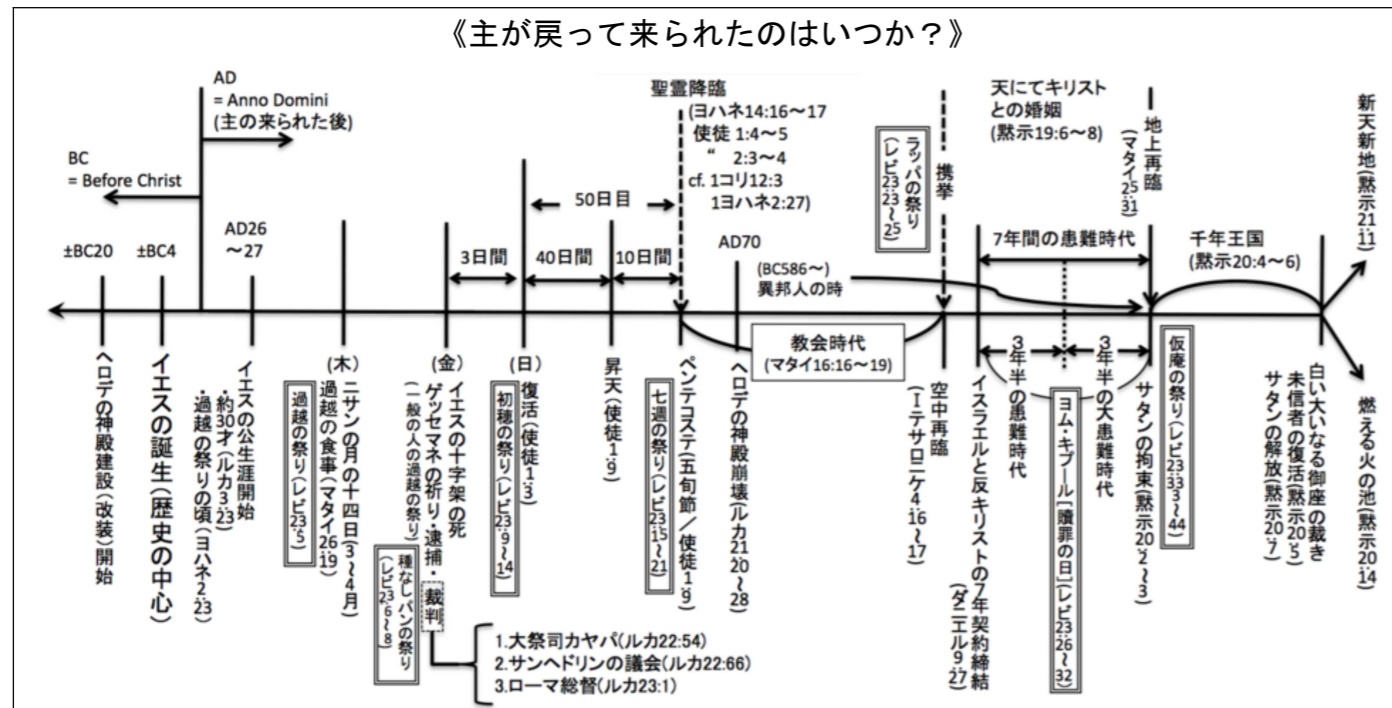
【新改訳 2017】

- 14:18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。あなたがたのところに戻って来ます。
- 14:19 あと少いで、世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生き、あなたがたも生きるようになるからです。
- 14:20 その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。
- 14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。

【祈りながら考えよう】

- (1) 18節で「あなたがたのところに戻って来ます」と聖句の意味には3つの解釈がある。どの解釈が妥当かを説明して下さい。
- (2) 19節で「世はわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます」とは、どういう意味ですか。
- (3) 「主をよく知る人」になるには、どうすればよいですか。21節から教えてください。

【解説】



(1) 三つの解釈

わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。あなたがたのところに戻って来ます。(18節)

「孤児にはしません」は、英訳KJVで「comfortless/慰めのない」ままにはしません、と訳されている。主イエスが死なれ、弟子たちの肉眼からは隠れてしまわれた時、弟子たちは孤児のような状態に取り残された。「そのような状態にあなたがたを捨て置くことはしません。あなたがたはいつまでも孤児であるわけではありません」と主は言われる。主は弟子たちを、見捨てて慰めのないままに残さない、必ず弟子たちのところに「戻って来る」と約束された。この「戻って来る」のはいつの日を指すのか、聖書学者の間では次の3つの解釈がある。

①「主の再臨の日」とする解釈

20節で「その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにい

ることが、あなたがたに分かります」と、主が語っておられるところから、旧約聖書の預言書の一部で「その日」と表現する場合、メシヤが現れる「終わりの日」を指していることから、「終末期の主の再臨の日」であろうと文字通りに解釈する人たちがいる(参照：ゼカリヤ14:4/その日、主の足はエルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山はその真中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ、残りの半分は南へ移る)。

しかし、この解釈によれば、主の再臨まで、主を信じる者たちは孤児でいなければならない。これでは、主の約束は弟子たちにとって慰めにはならない。

②「主が復活して弟子たちに現れた日」とする解釈

主が十字架で死なれ、三日目に復活された後、弟子たちにご自分の姿を現された日を指しているとする。しかし、復活後に主が弟子たちにご自分の姿を現された日であるとすると、主はその後昇天され、姿を消してしまわれたわけであるから、弟子たちは再び孤児となってしまうことになる。

③「五旬節の聖霊降臨の日」とする解釈

第3の解釈は、「五旬節の聖霊降臨の日(ペンテコステ)」に、主は聖霊という方として、弟子たちのところに来られた、というものである。この解釈は19節以降の聖句からも最も妥当と思われる。

主イエスが聖霊として来られる時、どうして私たちは孤児とはならないのか。それは、聖霊が私たちのうちに住んでくださるからである。17節で、主が「この方はあなたがたとともにおられ、また、あなたがたのうちに住まれるようになるのです」と言われた通りである。この結果、私たちは孤児とはならないですむ。

(2) 世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます

あと少いで、世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。

わたしが生き、あなたがたも生きるようになるからです。(19節)

「あと少いで、世はもうわたしを見なくなります」との主のみことばのとおり、不信者の中で、主の埋葬の後、主イエスを見た者はひとりもない。主の復活の後、主を見たのは、主を愛していた者たちだけであった。

「しかし、あなたがたはわたしを見ます」とは、主の昇天後も、弟子たちは信仰によって主を見続けていたと言える。世がイエスをもはや見ることができなくなった後も、弟子たちは主を見続けた。

私たちと共に住み、私たちのうちにいて下さる聖霊の神と私たちとの関係は、どのようなものであるかと言うと、「神秘的な一体」であり、主が、「わたしが生き、あなたがたも生きるようになるからです」と言われた関係である。

(3) 神秘的な一体

20節の「わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります」とは「神秘的な一体」のことである。

イエスが信じる者の中に「おり」、同時に、信じる者はイエスの中に「おる」、というのはどういうことか。よく使われる例話は、「火中の火かき棒」である。火かき棒は火の中にあるが、「真っ赤になった」火かき棒の中にも火がある。

イエスが信者の中に「おり」というのは、聖霊を通して「イエスのいのちが付与された」という意味においてである。事実、イエスは聖霊を通して信者の中に「いのち」として住んでおられる(コロサイ1:27「あなたがたの中におられるキリスト」、同3:4「あなたがたのいのちであるキリスト」)。

これは、私たちが主イエスにつながっていること、確かな証拠であり、また主イエスの中に私たちがいて、同時に、主が私たちの中にいてくださるとのことなのである。

これは、人格的な結び付きのことであり、この現実によって、私たちは、決してひとりぼっちであることはないのである。

(4) 主を愛しているかどうかの本当の試金石

わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人は

わたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。(21節)

主を愛しているかどうかの本当の試金石は、主の「戒め」に従っているかどうかである。主が私たちに孤児にはしないという約束が与えられているので、私たちはその主のみことばに従うことができる。自分の力でみことばに従えるのではない。私たちの中にいてくださる主の御霊が、私たちに、それができるように助けてくださる。私たちが流れている主のいのちが、「みことばに従うことができる力」を私たちに与えてくださるのである。

私たちが御霊の神の助けによって、みことばを守ることができた時、私たちは主を愛しているという実感を持つことができ、主ご自身を身近に感じることができる。

御父は全世界を愛しておられる。しかし、御父は、御子イエスを愛する者に「特別な愛」を抱かれる。このような人々はイエスからも愛され、イエスは「特別な方法で」ご自身を彼らに示される(啓示される)。

救い主イエスを愛すれば愛するほど、ますます主を知ることができるのである。それが、「わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します」ということである。